

ドクター・オブ・
フィロソフィー 鈴木佳秀君の『申命記の文献学的研究』に対する授賞

審査要旨

「申命記」は旧新約聖書の中での重要な一書であるが、文献学的には複雑な問題を内包している。異なる人称とその単・複数が入りくんで出てくる。「申命記」の根幹がユダの王ヨシヤの宗教改革（前六二一年）——鈴木君は「（祭儀）行政改革」と呼ぶべしとする——の基本文書たることは学界の通説であるが、その根幹は何かが久しく未解決のまま放置された問題であった。本書は文体要素（人称・数）を、それが用いられている歴史的背景と厳密に結びつけて解明し、申命記の文献学的研究であるのみならず、その編集史的研究にまで進み、歴史的研究としても画期的な成果をあげている。編集過程を上述の改革とその挫折——ヨシヤ王の戦死（六〇九年）——、ユダ王国の滅亡（五八七年）、バビロン捕囚に至る歴史、さらにいわゆる第二神殿時代（五一五年以降）まで連動したものと見ている。

「序論」について第一章で本書の問題意識との関連で研究史が辿られる。この章のみならず、巻末の七十頁に及ぶ詳註が示すように、本書の学問的価値はその独創的な見解の提示にあるのみでなく、今日までの申命記研究、さらに旧約研究全般との対決にある。

第二章で独自の文体分析の基準を設定し、数の交替と人称の交替を区別する必要を説く。殊に二人称単数形で語りかけられている場合は三つの用法が存在することを発見している。第一は共同体の構成員個人々人を対象とするもの。

第二は一定の職責を担う役人や祭司が対象で、第三は国家と国民全体を統合してイスラエルを「君」と呼びかけるもの。この三つの文体が三つの編集段階に依拠していることを裏づけるのが第三章。法を語る時の単元構成が「法的事例の設定」という一定の類型に従っていることを見出し、その類型が上述の三つの観点に応じた発展過程と重なっていることを立証している。この文体と形態上の分類に基づいて申命記本文の分析を行い、複数の編集段階を識別し、本書の中心部分をなすと言えるのが第四章。

(続く第五章では、ヨシヤ改革前後の歴史状況の変化と重ねて九層の編集段階を識別しているが、二人称複数形による段階を二つとするのはやや疑問で、一つとする方が全体との関わりですっきりする。)

ヨシヤ王による改革の担い手を、相手に戒めや掟を語りかける文体によって、明らかにするのが第六章。鈴木君は改革の担い手となったのは申命記独自の表現に従い「レビ人祭司」であったとする学説を支持し、それを強化している。ヨシヤ王によって役人として登用されたレビ人祭司こそ国家主導の行政改革の担い手であり、改革の仕上げである法編纂に携わった者だと見ている。

法編纂の素材として、本書は三人称による古い規定と、地域の青年教育に関係する個人々人を対象とした二人称単数形の戒めや掟を考えているが、この素材を土台に、中央政府の行政に関する規定群を中心に、地域の秩序の維持に係る戒めや禁令からなる法編纂がヨシヤ時代になされた、と見るのである。この法編纂を核として、モーセが全イスラエルたる「君」に語る説教が増補され、ナシヨナリズム強化の編纂作業が続けられた。

文体が「君」から、「君たち」に変化したのは、「君」がもはや国家の役人や全イスラエルでなくなった、ヨシヤ王

死後の時代である、とする。改革の担い手が中央政府から追放され、少数派に転落した事態と関わらせられている。改革の正統性を主張するため、モーセが語る説教で法編纂を包み込み、新たな説教部分の聞き手を少数派となったヤハヴェの神の信仰者たる「君たち」に限定し、全体を編集し直した、と見る。さらに王国が滅亡し捕囚を迎えた段階で、過去の歴史をモーセが告白するという枠組み部分の文体が一人称複数形を採用している。この歴史回顧が既存の法典の前後に加えられる。それによって聞き手も、モーセが「我々」という言葉で回顧する歴史に主体的に参加し、モーセの同時代人の如く律法を守り、契約に与かる者となるように、文脈が構成されている、と見る。戒めや掟の対象である「君」が「君たち」を含め、主体的にモーセの告白に参与する「我々」と比定されるに至った、と断ずるわけである。この部分はM・ノート以来いわゆる「申命記史家」に帰せられる部分に重なるが、鈴木君は、「申命記史家」説を否定しないが、これを新しい光で見ることが教えた。最後に三人称による構成の最終段階を第二神殿共同體と関わるもの、としている。モーセ像が前と変化する（モーセの遺言行為）。

本書が申命記の複雑な文体の由来を王国滅亡直前の激動の只中で行われた編集作業に帰し、時代状況に応じた編集技法に求めて、究明した成果は見事である。欧米の研究者が長い間放置してきた謎に挑戦し、一つの答えを出した。論証のため欧米の研究者の所論と対決し、殊に問題解決のために、方法論に明確なものを打ち出した。新約聖書を含め、編集史的研究が近年盛んであるが、その点からも本書は高く評価されてよい。本書は元来クレアモント大学院に提出されたものであるが、その Ph. D. 論文がアメリカで評価されたのみでなく、日本の学界のため新たに書き下された本書はわが国でも高く評価されている。